

平成19年度 第3回社会教育委員の会議 会議録

- 1 開催日時 平成19年11月20日(火)
午後2時00分～午後3時35分
- 2 開催場所 宇都宮市役所 B1中会議室
- 3 出席委員 13名
廣瀬委員長, 網河副委員長, 高橋委員, 高田委員, 石下委員,
山野井委員, 橋本委員, 塚田栄一委員, 若度委員, 贄田委員,
松江委員, 吉野委員, 塚田典功委員
- 4 会議の公開・非公開の別 公開

5 傍聴者 1名

6 議事

(1) 報告事項

- ①平成49回全国社会教育研究大会について
②(仮称)第3次生涯学習推進計画策定懇談会について

(2) 協議事項

- ①(仮称)親力向上支援プランの骨子案について
②成人式の課題への対応について

7 その他

8 閉会

9 発言の要旨

廣瀬委員長

それでは、会議次第に基づき、本日の議事を進めてまいります。
まず、報告事項①の「平成49回全国社会教育研究大会について」ですが、大会の概要について事務局からの説明の後、大会に参加した松江委員から感想などを報告いただきたいと思います。
それでは、事務局から説明をお願いします。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

次に、松江委員から報告をお願いします。

それでは、基調講演からご報告させていただきます。資料の4ページをご覧ください。併せて、小冊子になっております資料をご覧ください。幸いです。基調講演は、政策研究大学院大学教授の岡本薫先生のお話でございました。

政策研究大学院大学には、行政や社会教育に関わる学生が集まり、モチベーションの高い授業を行っており、授業の質が大変高く、結果を出さなければ許されない授業を行なっているということでした。

岡本先生は、プロフィールにもございますが、文科省のキャリア出身で生涯教育の基本を担い、築いていきたいという考えの持ち主であると思われました。

生涯学習という言葉がいま氾濫している中で、社会教育はその一部として捉えられるといった社会教育の意味と言うようなことからはいり、学歴社会ではない生涯学習社会を目指した時に何が重要かということ、非常に分かりやすいお言葉でご説明いただきました。

社会教育とは、青少年及び大人に対して行なわれる組織的な教育であると定義なさいます。目標設定が非常に重要であり難しく、責任のある仕事であるという説明を受けました。

目標設定の中には、住民が気づいていないニーズを探し出さなければ意味がないということで、本当に大切なことであると感じました。

また、教育基本法についてもお話いただき、難しいところもありましたが、私たちが常に協調しながら社会教育ということを考えて歩んでいかなくてはならないと、改めて認識させていただきました。

岡本先生は著書もたくさんあり資料にも紹介されていますが、私も先生の本を読みたいと感じました。

続きまして、シンポジウムの報告をさせていただきます。資料の5、6ページをご覧ください。

テーマは、「新しい公共作りに貢献する社会教育の役割」でした。参加された方々ですが、まずコーディネーターの内海先生。こちらは、社会教育のスペシャリストとも言える教授です。

次に、シンポジストですが、神戸の震災を機に、まちづくりに立ち上がったという中村順子さん。環境問題に取り組んでいらっしゃいます池田満之さん。スポーツ振興に取り組んでいらっしゃいます野崎武司さんの3人です。非常にバラエティに富んだシンポジストの皆さんで、話題に広がりがありまして大変素晴らしいシンポジウムでございました。

まず、内海先生のお話は、リーダーを育てるということは非常に大切であるということでした。

次に、中村さんのお話ですが、神戸の震災が大きな転機になったということで、日常的な地域のつながりを安全なまちづくりに生かしていきたいとのことでした。中村さんは、主に神戸の東灘地域を中心に活躍なさっていますが、目標としては、人口の1割を参加する人にしたいとの事でした。

次に、池田さんですが、平成14年のヨハネスブルグ・サミット(持続可能な開発に関する世界首脳会議)の岡山市特別代表です。まず、環境問題に日本が結果を残すのだと使命感をおっしゃっていました。

野崎さんは、スポーツ振興ということで大学の教授という立場を生かされまして、地域のいろいろな方とつながりを持っていらっしゃいます。その言葉の中で印象に残ったのは、「案外、子どもたちというのは、活発なようできて、愚痴っぽい」だそうです。「その愚痴に耳を傾けるんだ。大人が子どもの知恵を刺激して育てていく必要がある」と、そのようなことを、おっしゃっていました。

それぞれの先生達は、いろいろな活動をされていてやはり資金集めのご苦労があるということでした。活動のモチベーションとしては、特に、認められること。人に褒められることがとてもうれしいと、素直な感想を述べられていました。とても先生達を身近に感じました。

立場が人を育てるという言葉がございしますが、リーダーという立場が、リーダーを育てるのかなと思いました。

続きまして、私が参加させていただきました第1分科会でございます。参加者は210人前後で、事例発表は二つございました。

まず初めに、「原点に立ち返って考える社会教育委員の役割」です。こちらは、島根県斐川町の社会教育委員の会会長の青木さんが発表してくださいました。

事例については資料のとおりでございますが、2年間に一つ、教育委員会からの諮問に対する提言をまとめています。

28,000人の田園都市で12人の社会教育委員がおり、2カ月に一度定例会を開いています。話し合いの密度や、非常に積極的な活動に感銘を受けました。

続きまして、2番目の事例発表「社会教育委員が仕掛ける社会教育活動」です。長野県豊岡村の教育委員会の方の発表でございました。

豊岡村は、人口7,150人、世帯数が2,000戸の小さな村で、その村の中に二つの小学校と一つの中学校があります。

小学校で行ったアンケート調査で朝食の内容に問題を感じたところから、なぜ朝食を取らないのだろうと教育委員会が社会教育委員会に諮問し、生活リズムを改善しようという機運が高まったということです。

ただ、宇都宮市で考えますと、この規模は一つの自治会か一つの学校区であるのでネットワークの軽さにつながるのかなと思いました。しかし、非常に多岐に渡って、子ども達に必要なことを社会教育委員、教育委員会、学校、地域が一丸となって取り組んでおり、私たちにも必要なことと感じました。生活リズムを改善する提言のスローガンである「早寝早起き朝ごはん、ゲームをやめて本読もう」を掲げ取り組んだとのことでした。

次に、助言者の岡山大学 教育学部 准教授の熊谷慎之介先生の第1分科会のまとめを申し上げます。

2事例とも大変すばらしい発表であったということです。行動する社会教育委員が求められていて、答申だけではなく、行政と市民のパイプ役ともなる働きが求められています。自分がやるという意識、企画力、想像力を持ち、さらに活動の活性化のために、職務を理解し、学習活動、教育委員会と連携していくことは、非常に大切なこととおっしゃっていました。

結びに、第1分科会での質問事項や私の感想などを申し上げます。こちらの分科会に参加された方は熱心な方が多く、社会教育委員歴30年というような方が結構いらっしゃいました。具体的な推進方法だとか、定例会の謝金はどうなっているのか。県と市町村の連携、研修の必要性について質疑応答がありました。

熊谷先生の言葉で私の印象に残っているのが、「今、学校は液状化現象を起こしている。その場合、個人だけを直してもだめではないか。家庭、地域が中心になって、勿論ご自身も巻き込んで、全ての教育を見直さなければいけないのではないか」ということでした。

改めて、社会教育委員という立場の意味を、私なりに理解できた研修でございました。以上、全国大会の報告とさせていただきます。

廣瀬委員長

ありがとうございました。よく勉強されたのが分かる報告でした。

長野県は県民運動が非常に活発で、その中でも社会教育が特に大切にされております。公民館の数も日本で一番多いし、いろいろな人が公民館で活動しています。社会教育の意気込みについては、学びたいところがたくさんあります。松江委員、本当にお疲れ様でした。

それでは、次の報告事項②の「(仮称)第3次生涯学習推進計画策定懇談会について」を事務局から説明いただきたいと思います。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

ただ今の説明につきまして、ご意見等があればお願いします。

塚田典功委員

生涯学習が大幅に変わっていくように見えますし、時代の流れになっているのだらうと思います。今まであったプログラムは、全くこの時期を境に無くなり、まちづくりという形になっていくのでしょうか。

また、コミュニティセンターや生涯学習センターで今まで実施してきたプログラムが多々あり、受講している方も多いと思いますが、それを指導してくださる人材について伺いたいと思います。非常にいい計画であるし、民間でやることも増えてきましたので、これから変わっていくことを私も期待しておりますが、「人づくり、まちづくり」にどれだけの人が関与できるか、この2項について伺いたいと思います。

廣瀬委員長

非常に妥当なご質問だと思います。事務局の説明をお願いします。

事務局

生涯学習そのものが無くなる訳ではありません。今まで実施していた事業はこのまま継続いたしますし、環境の方も整えていきます。その中でも、社会教育の部分、家庭教育なり、地域教育を今まで以上に強化をしていくことを考えております。

また、人材育成に関しても、こちらの部分を強化していくこと、例えば研修会を何回か開催することを考えております。

塚田典功委員

それに当たって、一番負担になるのが現場です。指導員をやられている方にとっては、対象者が増えることもあります。自治会を抱えながら、生涯学習に関する現状が色々あろうかと思えますし、これから出前講座なり人材派遣など、色々作っていくものと思いますが、地域の中にいると、やっぱりその人の仕事量は多いものですから、極力、まちづくりができるような環境整備が必要です。

難しいとは思いますが、仕事量が増えないような仕組み、プランといったものがありますか。

廣瀬委員長

現場の仕事量の問題は非常に重要ですし、職員の負担や今まで実施していた事業への配慮は必要なことであると思えます。

関係する課が連携を取り合い、例えば、まちづくりのことや生涯学習のことなど、今後は整理しながら進められると思われまますので、そのような理解でよろしいでしょうか。

他に、お気づきの点、ある方お願いします。

橋本委員

私、自治会長を務めていますが、本当に仕事が多くなっています。

例えば、ひとたび自治会長を引き受けますと、社会福祉協議会や体育協会など四つ五つと一人の肩に負担がかかってきます。会計や副会長を引き受けなければならないこともあり大変です。

これからは、教育委員会だけでなく、役所全体で考えるべきことだと思います。市民協働と言いますと体裁はいいのですが、なかなか難しいのが現実です。

廣瀬委員長

ただ今のご意見は、他の自治会長さんからもよく耳にします。

事務局の方では、かなり密に打合せ会議を行なっていますので、そのうち何らかの成果が現れるのではないかと期待しております。

山野井委員

今は、子どもの居場所作り、イコールお年寄りの居場所作りになっています。全てが、子どもをターゲットにしています。放課後子ども教室があり、地域のまちづくりというと、大人と子どもが一緒になってやるという命題があります。全ての焦点が子ども、具体的には小学生、後はおじいちゃん、おばあちゃんの二つに絞られ、ぐるぐる回ることになります。子ど

もたちは、子ども会育成会、PTAの中でおじいちゃん、おばあちゃんに睨まれますので、毎回、忙しくても参加することになります。そうすると、子どもが非常に忙しいところ、同時に子ども会育成会の役員は本当に忙しくなります。それで、実施する方とは言いますと、例えば、ある時は主催者、ある時は招待をされる方と、同じ人間がぐるりと回ることになります。自分が招待される時は、しっかりやってほしいとだれもが言いますので、役割を受けた人はしっかりやらなければなりません。活動する子ども達、大人の人達は、活発であるけれど少しくたびれが見えてきたと、現場の人の切実な声が、大きな声でなく、小さな声が聞こえつつあります。

同時に、この所、急に多くの小学校で職員室の電気がついている時間が遅くなりました。活発に活動されているものと思いますが、我々にカバーできることがありはしないだろうか、魅力ある学校づくりでありますとか、何か、お手伝いできないかと思えます。

高田委員

学校には学校評議員制度がございますが、2年前から魅力ある学校づくり地域協議会へと変わりつつあります。20年度までに、市内の全校で魅力ある学校づくり地域協議会が発足いたします。

先行して取り組んだ学校では、地域の方、PTA、子ども会にがんばっていただいて、子ども達に良かれと思う行事を立ち上げていただいています。ひとりの子どもが学校というエリア、地域というエリア、家庭というエリアで育ちます。これまでの学校評議員会には、主に学校経営に関して校長の質問に対してアドバイスをいただいております。これからは、地域、学校、家庭が対等の関係で、同じ目の高さで、一人の子どもの姿をいろいろな角度から見て、そのお子さんが負担過重にならないように、それぞれのエリアでうまく活動できるように、機能をお互いに調整しあうのがこの魅力ある学校づくり地域協議会であると思っています。

中央小学校区でもこの組織が立ち上がりますが、私は、新しい組織ができたから新規事業をやろうという発想は全くございません。それぞれのエリアで活躍していただいている皆様の活動内容を、お互いに見直して、一緒にできるものがあるかとか、そのような視点で逆にスリム化する方向でこの協議会を立ち上げたいと思っています。子どもにとってどのエリアでもうまく機能できるような、その子の毎日が楽しくなって、学校でも家庭でも地域でも活躍できるような協議会にしていきたいと思っています。地域も疲れ、子どもも疲れるようなことだけはないようにしたいと思っています。

もう一点、小学校が夜遅くまで電気がついている問題ですが、本当はそうでもないのですが、いろいろ教育改革が進んでおり、中核市でもありますので、他市でやっていることには負けられないでがんばろうという意気込みで新規事業が立ち上がっております。その中で、スクラップアンドビルドという言葉がありますが、教育の場合、スクラップできずにどれも立ち上げてビルドアンドビルドでいつてしまっているところがあります。パソコ

ンも導入されてはおりますが、事務量も増えております。膨大化している点を行政と我々校長会が手を組んで、スリム化できるところはスリム化し、多忙感を解消していきたいと思っております。

廣瀬委員長

多くの人たちが関わるようになったことは良いことですが、事業の工夫をもう少ししていただきたいというのが皆さんの声だと思います。生涯学習推進計画の中で、住民の負担だけを求めるのではなく、精選をしていくとか競合していくという発想も、是非取り入れていただけるよう生涯学習推進策定懇談会へお伝えいたします。

それでは、協議事項に入らせていただきます。協議事項①の「(仮称)親力向上支援プランについて」を、事務局より説明をお願いします。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

ただ今の説明で、このプラン案はテーマや課題設定が良くできていることがお分かりいただけたものと思います。具体的な提案、例えば、こんな事業ができないかといった観点から、委員の皆さんで意見を交わしていただきたいと思っておりますがいかがでしょうか。

賛田委員

ごえもんは、個人から始まったものですが、私の地域では、今は自治会の行事、子ども会の行事で子どもを取り合うのではなく、みんなでうまく1つにまとまるような傾向になっています。

みんなが、それぞれ自分の仕事に従事しながら、一人の人がいろいろな仕事をするのではなく、みんなで力をあわせて一人の子どもを見守るような傾向になっています。その意味で、このプラン案はすごく良く書かれていると感心しています。うちのごえもんについて、わたしの言おうとしているのはこれだなと思いました。

また、保護者の教育能力の向上については、先輩のお母さんたちの助言がすごく必要なのではないかと思います。先輩は、年の近い先輩、年のはなれた先輩、いろいろな層があったほうが良いと思います。

高橋委員

育成会を上手に利用することはできないでしょうか。

私の子どもが小さい時には、資源ごみを回収しました。リヤカーを引いて一軒一軒、おはようございます、こんにちは、ありがとうございますと言って集めてきて広場に集まって、みんなで新聞の縛り方など、いろいろな話を親どうしがしていました。その活動が今、全くありません。どこも車で来て、みんな地域の人が一定の場所に置いた資源ゴミを、黙ってもらってきてそれっきりです。そこには、子どもが存在しません。先ほど、子どもが取りっこになる話が出ましたが、だいたい取りっこになる時は、大人が全部計画をしたところに、子どもが参加するものと思います。安全面

でも、これでもかと大人が念を押して、すべて大人が計画をして、いかにも子どもがやっているような雰囲気ですけど、子どもはそこでただ参加しているだけです。ですから、何かそこで、育成会等で子どもが一から活動できることはないでしょうか。

昔は、手間ひまをかけました。親も時間をかけました。私は、子どもがちょうど子ども会に入るときに家を建てたものですから、子どもと一緒にその地域になじんでいきました。子ども会に参加をして、地域を回って歩くことにより、よその母親、地域の方々とお付き合いができました。親にとりましては、いいシステムだったと私は思うのですが、子どもも、こうゆう時は、こうするんだよと、どこかのおばちゃんに言われます。今、挨拶しなかったね、とか言われ、そこで、ありがとうと言えるようになります。資源ゴミ回収の一つの例ですが、地域の中で、何かそのような活動が子ども会や育成会を中心にしてできないものでしょうか。子どもをセッティングされたところに、ただ参加させて家に帰らせるのではなく、何かできないものでしょうか。

廣瀬委員長

地域の活動に子どもと親と一緒に参加することで、実は親の教育も親力も高まっていくものと思います。

松江委員

私、青少年育成会と子ども会連合会の会長をしております。自治会もそうですが子ども会の加入者が年々減っています。その原因は、子ども会に加入しますと親が手伝わない訳にいきませんし、子ども会の行事に参加するのに親の送り迎えが必要になります。役員になる人がいないため、子どもたちは参加したくとも、子ども同士で遊びたいのに、子どもはいるのですが休止中の子ども会があります。先ほどから話しに出っていますが、親がかりの事業が多くなって、益々自分たちの首を絞めています。

先日、テレビ番組で見ましたが、昔なら子供同士、原っぱで走って遊べば自然に身に付くようなことを家庭教師に有料でお願いしていました。子どもが、集団で遊ぶ力がなくなっているのかもしれない。

若度委員

現場で子どもの取りっこになっているお話が出ましたが、子ども会、青少年育成会、PTA、まちづくり推進協議会などで、いろいろな行事が関わってまいります。私の地区では昔からの形、積み上げができています。いろいろな組織が立ち上がっておりますが、最近、負担が増したなど感じています。捨てることも必要だと思います。

なぜかと申しますと、子どもの数が減っています。昭和小地区では、子どもが300人余りで、75歳以上の方が900名いらっしゃいます。形が変わったのは、次代の背景とも思いますが、それに見合わせて会合を変えていかなければならないと思います。

私も、自治振興部でやっているみんなでまちづくり会議に出ていますし、

総合計画推進委員会にも教育部会として出ていますが、ごっちゃになっています。また、市民協働もそうですが縦割り行政を横のつながりに持っていく仕組みを、強く作る必要があります。教育委員会の中でも同じです。課ごとにいろいろな会議を開催していますが、いいものが縦になっております。だぶっている部分がたくさんありますので、それらをまとめて、いらぬものをスリム化と言いますか、もっと中身の濃いものを作る仕組みができればいいと思います。

廣瀬委員長

皆さんも実感されていることをはっきり言っていただいたと思います。新しい事業を興すよりも、今ある事業をむしろスリム化したり、あるいは統合したりすることも必要なことと思います。

塚田典功委員

生涯学習は、まちづくり協議会が原点になるものだと思います。現在、いろいろな組織から成る、まちづくり協議会を議論しながら作っている段階だと思いますが、この既成概念を一回破ってはどうでしょうか。

ある催し物に行けば、主役の人が準備していたり、参加者と受付担当が一緒だったりするのが現状です。例えば、交付金、補助金の問題もありますが体育祭だったら体協がやるという既成概念を、各地区のまちづくり組織を行政主導でもいいですから、一回壊して、その中でどういうまちづくりができるか検討してはどうでしょうか。まちづくりは人づくりだと言われます。その中から、新しい人材も出てきて防犯部会があったり、環境部会があったり、体育部会であったり、福祉部会であったりしたところに新しい力が出てくる訳です。今までの補助金の制度では、ひも付きのような感じでは、発展的なまちづくりはできません。もう、高齢化になっている訳で、例えば、この地区では、体育祭と敬老会を一緒にしてしまおうとか、おのおのの仕組みづくりが、地区の規模とか人口比率によってできてると思います。同じ地区ばかりではありませんので。

もし、親学を落とし込むとしたら、まちづくりだと思います。まちづくりで、みんなでイベントとか事業を考える中で、協議される中で仕組みを変えていかないと、縦割り行政になります。同じ人が、ぐるぐる回る話が出ましたが人材がないからです。既成概念を見直せば人材が出てくる可能性があります。行政のOBの人がやれることもあるだろうし、参加できることもあるだろうし、現役の育成会の人や子ども会の人や事業によってはやってくれることもあるでしょう。

まちづくりを一回改めて見直して、行政がモデル地区に交付金、補助金交付という問題がありますが、既成概念を壊してまちづくりの新しい形というものを作ってもらいたいと思います。

廣瀬委員長

まとめのようなご意見をいただきました。もう連携という段階でなく、再編すべきとのご提言でした。

続いて、もう一つの協議事項②の「成人式の課題への対応について」を事務局から説明いただきたいと思います。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

税金をかけて実施する成人式の課題への対応策としましては、代読ではなく市長本人が映像で熱い気持ちを届けるといふものと、「宇都宮おもてなしBOOK」を配布し、あいさつの中で内容に触れるというものでした。

「宇都宮おもてなしBOOK」について、ご説明いただきたいのですが、石下委員にお願いします。

石下委員

「宇都宮おもてなしBOOK」については、まちづくり推進機構と商工会議所青年部や青年会議所の先輩が協力して作り上げた経緯があります。私たちのメンバーは、全員この本を持っています。

内容は、おもてなし、歴史、まちづくりが、こと細かに書かれてありますので、新しく成人になられた方々に是非これを全部読んでいただいて、宇都宮のまちとは、こうゆう所なんだ、おもてなしとは、こうゆうものなんだとわかっていただきたいと思います。新成人の方々全員にお渡しすべきだと思いますので、是非、実行していただきたいと思います。

廣瀬委員長

ありがとうございました。よくできた冊子だと思います。少しでも、教育機会を充実させていきたいというご提案でしたが、他にご意見がありましたらお願いします。

塚田典功委員

この成人式会場に、親が入れないものでしょうか。希望者だけでよいので、親も一緒に市長のメッセージを聞くことはできないものでしょうか。ご検討いただきたいと思います。

事務局

会場の都合で、現状では無理です。他の会場に映像の装置をつけて対応しますと、かなりの金額がかかるものと思われれます。

廣瀬委員長

親に関することを、この機会に何らかの形で関わらせることに私は賛成です。「自分が二十歳になったから祝ってもらおう」と言うよりも、「20年前に生んでもらったことに感謝する」のが成人式だと思います。親が成人式に参加することが物理的に無理ならば、親からのメッセージとか、親を意識させることは必要です。これから親になる人でもあるわけですから、その結節点として、宇都宮の親学のプログラムの一つとして、議論していただければ嬉しいです。

吉野委員

今回は期間的に難しいと思いますが、今の子どもは、クイズに大変興味

があります。今、何とか検定とかはやってありますが、「宇都宮の成人検定」みたいなものがあって、成人としてこのぐらいのことは最低限知っていてもらいたいというような、この「おもてなしBOOK」をテキストにして、そんな検定があってもいいと思います。

遊びかも知れませんが、テストで考えたことはどこかに残るものと思います。常識的に大人ですと、知らなければならないことはあると思います。例えば、銀行のことや挨拶とかはもちろんでしょうけれど、それすら教わっていない人もいます。言ってできないのではなく、教わってこないのです。学んできてないのです。ですから、検定試験のようなもので、遊びで、そんなに真剣にならないで、それをやることによって「ああ、そうか、ああ、そうか」と、自覚をさせる一つの手段になるのではないのでしょうか。

廣瀬委員長

それは、面白いですね。以前、ある企業で親の生年月日と名前を聞くことがありました。アイデアの一つとしてご検討ください。

成人式を前向きに、教育事業にしていく意気込みが見えてきましたので、今年の成果を見たいものです。私たち社会教育委員も成人式に参加することになっておりますので、ご参加いただけますようお願いいたします。

以上をもちまして、社会教育委員の会議を終了いたします。